

田坂順子編 『扶桑集一校本と索引一』

金原, 理
熊本大学文学部教授

<https://doi.org/10.15017/11999>

出版情報 : 語文研究. 60, pp.62-63, 1985-12-15. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

△ 紹介 △

田坂順子編『扶桑集——校本と索引——』

金 原 理

このたび、田坂順子氏の『扶桑集——校本と索引——』が上梓された。B5版で二三〇頁。全巻、編者の美しい手書きである。

全体を校本篇と索引篇とに分け、校本篇は同集の本文を掲出し、その頭に詩題の通し番号と行数を記す。これが索引篇の本文検索数字に対応する。校異は当該個所に※印を付して、下段に諸本の略号とともに示す。末尾に作品一覽と作者名一覽が付載されている。

索引篇は本文篇の詩句についての漢字一字索引で、排列は部首順により、同一部首内は総画数順による。詩一句を単位に本文を切り出し、該当する漢字の部分空欄にしてその詩句の何字目に当たるかを示す。索引篇の巻頭に部首一覽と検字表を配して、検索の便に供している。

表紙は桜地に赤蘇芳色で表題を中央に編者名を右に配して、白ぬきで横に「扶桑集」の三字が現代的なレイアウトを施されて、下方に位置する。また扉は本文とは別紙で和紙を使う。いずれ編者の好みによるのであろうが、装丁にも細かな心遣いが感じられる。

「はしがき」によれば、この校本を公にするに至ったのは「群書類従本以外は容易に入手したい現状の中で一人この私製校本を用

いて研究を進めるべきではないと考」えてのことだと言う。これは「はしがき」の終わりにさりげなく記された夫君への謝辞の言葉とともに、編者の優しい人柄をしのばせる。

この校本の底本に使用されたのは彰考館所蔵本である。周知のように「扶桑集」の現存諸本は巻七と巻九のみを伝える、残欠本であるが、編者の調査（『扶桑集』伝本考（『中古文学』二八号 昭和五六年一月））によれば、現存が確認されるものは、群書類従本を含めて以下の八本である。

- (1) 内閣文庫蔵林大学家本 貞享頃写、〔内甲〕
- (2) 内閣文庫蔵昌平坂学問所本 宝暦頃写、〔内乙〕
- (3) 祐徳文庫蔵本 近世中期写、〔祐〕
- (4) 松浦史料博物館蔵本 松浦静山の蔵書印有り、〔松〕
- (5) 彰考館蔵本 近世初期写、〔彰〕
- (6) 京都大学付属図書館菊亭家寄託本 近世中期写、〔京〕
- (7) 静嘉堂文庫蔵松井簡治家旧蔵本 近世中期写、〔静〕
- (8) 板本群書類従本、〔群〕

これら八本のうち静は略本で系統を他の七本と異にし、所収作品

数で内甲・祐・彰・京・群（一〇四首）と内乙・松（一〇三首）が対立する。また巻七冒頭付載の目録の書写のされ方について、彰・京は本来の目録の姿をそのまま伝えていたが、内甲・祐・群は目録の前半部を欠き、内乙・松は目録の前半を欠くと同時に、さらに本文冒頭の部立ての一部を目録の内容に取り込んでいた。転写の回数に比例して、本来の姿から本文冒頭の部立てを目録末尾へ混入させた内乙・松の形へ移って行ったと考えられる。

このような外部徴証から諸本間に既述のような特徴がうかがえるが、諸本共通の異同数や質、あるいは行数、字数、字配りなどの内部徴証によって、彰・京と、静を除く内甲他の五本が対立し、字形の近似、挿入された字の本文化などさらに細かな点の比較、また書写年代の検討から、彰は京に優り、内甲他五本間では内甲が相対的に優れていることを立証できる。

右の結果から現存諸本は三系統に分けられそれぞれ上位に彰、内甲、静が立つことがわかる。このうち静は略本なので外し、彰と内甲との優劣を検討すると、彰は巻七巻頭に目録を置くが、内甲はその前半が欠落しており、彰にある「墳」という小部立てが内甲になく、巻九という巻数表記もない。また両本共にある六〇個所の欠字のうち、内甲が彰を補える箇所四に対して、逆に彰が内甲を補えるのは一七あり、書写態度にしても彰は親本の判読困難な字体についてまで、できるだけ原本の姿を忠実に再現しようと努めている。右のような綿密な検討と手順を経て、校本の底本として彰本が採用された。

作品を読み解いて行く上で、索引の利用価値はきわめて大きい。中国文学の畑では当然ながら索引は早くから作られて来ている。

しかしこれが日本漢文の作品になると、まことに寥々たるものである。わずかに本間洋一氏の『凌雲集詩句索引稿』（富山女子短期大学紀要）一六輯、辰巳正明氏の『懷風藻漢字索引』（新典社）、川口久雄・若林力両氏の『菅家文章・菅家後集詩句総索引』（明治書院）、藏中進氏の『江戸初期無刊記本遊仙窟索引』（和泉書院）を数えるくらいであろうか。

ここに貴重な業績が一つ加わった。同学に連なる一人として、このたびの『扶桑集——校本と索引——』の刊行に、心から拍手を送りたいと思う。

（昭和六十年五月、權歌書房刊 四五〇〇円）